

2018年7月20日



第72号

HYAKUSHO-HYAKUSHO. HYAKUSHO-HYAKUSHO.

百姓百生

その65

足るを知る生き方

自給自足が理想かな？

丸山航介さん

HYAKUSHO-HYAKUSHO. HYAKUSHO-HYAKUSHO.

5年ほど前から木の根ペンションの住民である丸山さんとは、実験村の会合の時などによくお会いしていたのだが、「百姓百生」は初登場である。「何となく、自分は関係無いかなあ…」と書いていたらしい。引っ込み思案という訳でもなさそうだが、「自分の言いたいことを上手く伝えられない」のだと苦笑いをうかべる。

ところが話しているうちに、彼はたくさんの方のことを、ある意味生真面目に考えていることに気付かされた。そんな少しばかり複雑な思考を上手くまとめて伝えるのは、彼ではなくとも難しいに違いない。実際に弱冠23歳のとき、海上自衛隊のヘリコプター搭乗員という「それなりに楽しかった」仕事を7年も勤めながら、「このままでは世間知らずになってしまうのではないかと、大胆にもバイクの整備士への転職を決断したのだ。しかもこの転職さえ、彼に言わせれば「自衛官を辞める口実が必要だった」と言う。それから丸山さんは様々な仕事を経験し、東北大地震の翌年に三里塚の有機野菜の卸し業者の下で農業研修生になった。

「もともと野外の仕事は性に合うし、将来は独立もできるかなあ〜」と農業を選んだらしいのだが、そこに至るまでに「自衛官は場合によっては人を殺す仕事」とか、「農業は後継者不足だから

…」とか、「あの大地震で世の中が変わるような気がした」とか、とにかく様々なことをいろいろな側面から生真面目に考える、誤解を恐れずに言えば「少し面倒くさいタイプ」なのだ。その一方で丸山さんは、他人を非難したり不合理な事を声高に批判したりもしない、物静かであり群れない人でもある。

だから彼の本音は、じっくり話さないで伝わってこない。例えば「今は自分の畑を持って独立することは考えていない。だって大変そうじゃないですか」と言うのも、よく聞いてみると「電気なども極力使わない自給自足を考えてみたいし、それが本当の意味で原発にもなるのでは…」ということなのだ。彼はそれを「農地を維持するには売れる野菜も作る」営農＝独立とは少し違った目標だということに自覚しているし、実験村とは「関係無いかなあ…」という彼の心情も、こうした自覚の反映なのだろう。

でもこれって「かなり旺盛な自立精神」には違いないし、「自分で段取りして臨機応変に作業するのが好きなんです」と言う彼の性質だって、「自らの労働を自律的に組織する素質」と言えるかもしれない。

自立した、百の生業をこなす人々＝百姓が、自発的な共同体を形作って「農的価値」を追求するのが実験村のひとつの理念であるのなら、「丸山さんの今」は、けっこうそれを体現しているんじゃないの！？ って思ってしまうのだ。もっとも当の丸山さんは「自分の居場所」を探して、たくさんの方のことを生真面目に考えながら、それでもなんかひょうひょうと過ごしていくのだろう。

(事務局・佐々木希一)



実験村年次寄合のご報告

麦・大豆畑トラストの新体制と 四者協を批判する声明を了承

今年も恒例の実験村年次寄合が4月8日、
実験村の夕立の森で開催されました。



3頁の報告にあるように、今年は年次寄合の期日に合わせて、実験村立ち上げの時から中心的作用を担っていただいている柳川秀夫さん、石井恒司さん、小松巳規男さんの「古希の祝い」を開催するという企画（たくらみ？）が功を奏したのか、たくさんの村民の方々が参加してくださいました。

さて寄合では、昨年から課題になっていた「麦・大豆畑トラスト」に関する役割分担の見直しについて、事前の相談会で取りまとめた提案—財政と作業参加者の募集・受付・送迎の2つを、トラスト管理責任者と切り離



す—が了承され、今年も引き続き「味噌づくり」と麦の栽培に挑戦することになりました。

また昨年から報道されている「第3滑走路新設問題」については、主に「四者協の決定には、地域住民の意思が反映されていない」との観点から、滑走路の新設を決めた四者協の決定を批判する「声明」を出すことが確認されました。この声明は4頁に掲載されています。

当日は晴天にめぐまれ、夕立の森の清々しい空気の中で寄合が行われ、昨年からはまった周辺の杉林の間伐のことも報告されました。少し時間はかかりそうですが、間伐がすすめば周辺の杉林が明るくなって、夕立の森の雰囲気もますます良いものになりそうな予感がします。



ただ今回の年次寄合では、直前に会計を担当している樋ヶさんの自宅が火災に見舞われ、会計資料などが焼失したために会計のご報告ができませんでした。預金通帳などは復元が可能ですので、そうした作業に取り組み、改めて皆様にご報告したいと思います。

（事務局長・佐々木希一）

古希を迎えた「青年」たち

ネバー エンディング “ファイティング” ストーリー ～あるいは果てしない「闘争」の物語～

いろんなイミで実験村の「核」となってきた柳川秀夫さん、石井恒司さん、小松巳規男さんの3氏が満70歳となり、それを祝う会が4月8日（日）、成田駅西側の沖縄料理店、「ニライカナイ」を借り切って開かれた。

集まったのは、実は自身も古希だった「田代」こと高橋さんー本通信の創刊からしばらく印刷を引き受けてもらったーや労働情報の浅井さんー実験村の相談会の会場をしばしば貸してもらったーや原子力資料情報室・山口先生の「ヤマセミ」から巣立った上野香さんの一家、JVCの新旧のメンバー等々、挙げ出したら、それで紙面が尽きるほど。

ところが、祝われる3人の方は、一様に目出度くない心境だったようだ。

厚木市在住の小松さんは長年、米軍基地を発着する戦闘機の騒音等に原告として立ち向かってきたが、横田へのオスプレイ配備等々、状況はむしろ悪化の一途。

ただ、小松さんは闘志を表に出す方ではなく、実験村の会合には「ほぼ」皆勤賞で、いつも手料理と地酒を持参され、筆者などは、それが目当てで参加してた、と疑われたかもしれない？！ この日も持参の地酒をご馳走になった！

かつての「青年行動隊」の2人にとっても、第3の滑走路が日程にのぼる中、穏やかな心境には程遠かったろう。

筆者が密かに「ザ・百姓」ないし「Mr. 百姓」とアダ名を付けている石井さんは、前号で紹介された近況等を語ったが、思い出したのは数々の名言だ。「(農作業は) 段取り8分(準備で決ま

る)」「米も野菜も秘訣なんか分からない。米は年1回だから、一生のうちに何回作れるか」、そして、「人生は波乱万丈でもいいけど、農業は(天候等で) 波乱万丈では困る」と。

そして柳川さんは、自身を「蟻螂の斧」に例えて尽きない闘争心を語った。

ところで福田さんが『三里塚アンドソイル』の中で柳川さんのお父さんの「我慢の哲学」も触れていたのも、『児孫のために自由を律す』にも通底するのでは、と思ったものだが、柳川さん自身はシンポなどでよく「腹八分」に例えていた。

それで連想するのは、金芝河の「メシは天である」という詩の一節だ。

最初は「メシはメシアだ」というダジャレかと思ったものだが…。

二昔以上前、日韓の有機農業団体の交流で韓国に渡った際、金芝河本人に、安藤昌益が『統道真伝』で、人間を米粒に例えてることを告げると、「知らない」と言い、昼飯を一

緒にどうだ、と誘われたのに、怖じ気付いて断わったのが悔やまれるが、その後に泊まった全羅道の山中の集落で、その詩のイミを聞くと、「オマンマは大事だよ、ということだ」と教わり、筆者の祖母などが、ゴハン粒などを残した時に言っていたのと同じだ、と腑に落ちた。

その伝でいくと、西沢さんの、大根の葉っぱや皮も「捨てない料理」こそ、その究極の実践か、と勝手に得心するのだが、そんな事をあれこれ考えさせてくれる実験村が「限界集落」にならないよう、みんな元気で喜寿、傘寿、卒寿、白寿を迎えようぜ！

(善方記)



【地球的課題の実験村声明】

四者協による「成田空港の更なる機能強化」は認められない

1 去る3月13日、「成田空港に関する四者協議会」（以下：四者協）は、「成田空港の更なる機能強化」を決定しました（次頁下段）。

四者協は成田国際空港会社（NAA）と国（国土交通省）、千葉県と空港周辺9市町の首長だけで構成されていますが、今回の機能強化は、現空港に匹敵する1000ヘクタールの面積拡大、新C滑走路建設と現B滑走路の延長による独立運用や夜間飛行制限撤廃による騒音被害の飛躍的拡大など、重大な問題がいくつもあります。それは騒音地域も合わせれば1万ヘクタール以上、人口も数十万に及ぶ地域住民の生命や財産、そして地域共同体の存否にかかわる問題にもかかわらず、四者協ではついに最後まで、住民が意見表明や議論する機会とは与えられませんでした。

地域住民には日程も知らされることなく、傍聴も許されない密室審議だけを積み重ねて「地元同意」を判断したのでは、行政による「空の強制代執行」の始まりと言っても過言ではありません。

2 四者協は一昨年冬から各市町・集落で行った「説明会」をもって、住民との話し合いがなされ同意が得られたというかもしれません。しかし説明会は四者協からの説明以上の場ではなく、批判的な意見や住民側の提案に対して議論したり共に考える話し合いにはなりません。住民の意見は「聞き置く」だけで、四者協では改めて検討もされなかったようです。

住民がもっとも問題にした夜間飛行制限撤廃のことも、当初の4時間案に大反対がおき、「6時間スライド制」とか「7時間スライド制」が提案されました。しかし、4月に行われた東峰区説明会での空港会社の説明でさえ、『制限撤廃・飛行時間延長反対の声がほとんどで、「スライドならいい」という声はほんの数えるほどだった』ことを認めています。

議論は不十分であり、住民の大半は納得しておらず、「四者協合意」に住民の声は反映されてはいません。

3 最初、議会や各地の説明会でNAAの地域共生部長は、「期限をもうけず何度でも丁寧に説明し同意を得る」と明言していました。しかし昨年になって突然、「2020年オリンピックまでにA滑走路の夜間飛行制限を撤廃し、飛行時間を6時から24時までとし、夜10時以降の便数を現行10便から32便に増やす」ことが提案されたのです。

現B滑走路が2002年4月に供用された時も「サッカーワールドカップ日韓共同開催に合わせて」強行され、地元合意は無視されました。この動きに対して円卓会議を主宰した隅谷調査団の隅谷三喜男氏は「ワールドカップを期限とするなどはもってのほか、空港計画の変更は住民の合意を得てからでないと進めてはいけません」と批判しましたが、今回もまたオリンピックを口実に、将来世代にまで影響が及ぶ地域の問題がないがしろにされ、合意作りが切り詰められようとしているのです。

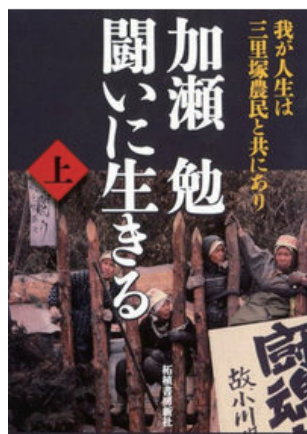
4 今回の空港機能強化は四者協での「合意」があったとしても、合意作りの過程に住民の参加はなく、住民合意とは程遠いものです。このまま次のステップに進めば、各地域・集落で行政による分断が生まれ、地域社会は対立と崩壊へと向かうこととなります。私たちは28年前、空港をめぐる対立の構図を解消し、成田空港問題を平和的に解決することを目的としてシンポジウム・円卓会議の場へと向かいました。心血を注いだ議論の結果が、空港建設には地域の合意が必要ということでした。そうだったからこそ私たちは、四者協合意にもとづいた行政手続きにすすむ前に、地域住民を含めた話し合いの場を早急に作り直すことを求めます。

加瀬さんの本 「闘いに生きる」

永田修

いま大自然は芽時の季節
若芽はわれらの希望と未来
新緑の煌めきはわれら人民の魂の輝き
若葉のしなやかさは温かさはわれらの心
薫風のさわやかさは人民の語り合い
醒めよ春雷は我が胎らからにあり
恐れよ
闘う意思の捨てることを

熱砂の如き熱き魂を込めて、
獄中闘争を続けるS同志に贈る
2016年5月5日 於82歳の誕生日



加瀬さんの魂の叫びともいえる「闘いに生きる」とどう向き合っていくのか。発信され続けている加瀬さんのメッセージに接するたびに、心がうちふるえてきた。現在を、そして未来をどう生きていくのか。この本はこのことを常に問い続けている。

もう一つの詩のことに触れます。

瘦地の北総大地
いのちを打ちこむこと幾千年
百姓が怒る 歴史が怒る
燃えたぎる三里塚は 叛乱の国
鎮のまま
くさりにつながれたまま 哭き叫ぶ
燃えたぎる三里塚は 叛乱の国
弾けるよ
闘いの魂がはげけ飛ぶ 暗黒の闇きりさいて
燃えたぎる三里塚は 叛乱の国

本文には説明はありませんでしたが、タイトルは「三里塚」。1970年代の人民新聞に掲載されました。この詩は曲をつけて、アラブで歌われました。1978年に戸村一作委員長がパレスチナ国際美術展に農婦の絵などを出品されて、この歌もうたって盛りあがったこともあるそうです。

「闘いに生きる」ことは闘いつづけていく加瀬さんの問いかけに答えていくしかありません。

「成田空港に関する四者協議会」が合意した「成田空港の機能強化」は、以下のとおり。

- ①滑走路の増設・延伸
 - ・ B滑走路の南側に、新たに3500mのC滑走路を増設
 - ・ B滑走路を北側に1000m延伸し3500mとする
- ②発着枠の拡大
 - ・ 年間発着枠を、現行の30万回から50万回に拡大
- ③夜間飛行制限の変更
 - ア) C滑走路供用開始後の発着時間
 - ・ スライド運用を導入し、滑走路ごとの静穏時間を現行と同じ7時間確保
(早番：朝5時～夜10時、遅番：朝7時30分～深夜0時30分)
 - ・ 空港全体の発着時間を「朝5時～深夜0時30分」に変更
 - ・ すべての滑走路について夜10時以降の便数制限を撤廃
 - ・ 弾力的運用は深夜0時30分～深夜1時に限定
 - イ) C滑走路供用開始までの発着時間
 - ・ 2020年の東京オリンピック開催までに、A滑走路の発着時間を「朝6時～深夜0時」に変更
 - ・ A滑走路について夜10時以降の便数制限を撤廃
 - ・ 弾力的運用は深夜0時～深夜0時30分に限定

来て！ 見て！ 伝えて！ 福島原発20km圏内ツアー

山下茂

梅雨空のもと、アラセブの親爺どもが9名、新幹線で福島駅へ。モニタリング・ポストがお出迎え。ここからクルマで相馬へ。さっそくツアーが出発。「来て！ 見て！ 伝えて！」はツアーのパンフレットのコピー。

20km圏内に入る。「あそこは仮置き場です」と案内のWさん。写真を撮りたいと言うと「まだまだ先にそこらじゅうにありますよ」。そのうちのひとつでクルマを降りる。えっ？ 積まれた黒いフレコンバックから白い煙が…。



南相馬の小高の駅前通りの本屋さんに立ち寄る。ほかにお店は見当たらない。

浪江の請戸漁港に至る。この小学校は地震直後に、車椅子の子も全員が数キロ先の山へ登り、津波から逃れた。が、翌日に避難指示。津波の行方不明者の捜索もできなかった。



「もう宿にいけますか？」「いや、飯は遅くなくても、風呂に入れなくても、原発の土手つ腹をみてやろう」ってんで、国道6号を南へ。立入禁止地区を突き抜けるから自転車、オートバイは通行禁止、クルマも窓を閉めるのが通行ルール。どの信号機も黄色の点滅、道路の両側はバリケードで道も家も塞がれている。

原発へ入る道路は開いているが監視員。どこぞの空港で見る風景。国道から見る原発ははるか木

立の向こう、原子炉建屋は見えず、煙突と作業するクレーンの頭が見えるだけだった。

ようやく富岡。名所の桜並木通り「夜の森」を走る。右側を並行する常磐線の線路の向こう側は立入禁止のバリケードが並行している。

ここから常磐高速道を北上して相馬へもどる。陽はくれていた。Wさんありがとうございました。

翌日は案内人なしで相馬の記念館へ。昨日渡ったあの大橋のあそこまで水がきたのか、津波の凄まじさをあらためて思い知らされる。

つづいて、昨年から住民が帰っている飯館へ。原発からは40kmも離れている長閑な山あいの村。山も谷もどこも緑、緑、…。でも田圃の緑は稲ではない、畑の緑も作物ではない…。そしてところどころに仮置き場。

村の道の駅で昼食。売店で買った農作物をお店のコーナーにある放射能測定機にいれる。10分待つ間のビデオが村の歴史を紹介してくれる。この村の3・11は、地震でも津波でもなく、全村避難から始まったことを。

立入禁止地区を通り抜けて福島市にもどろうと、



国道399号線を南下。山の中へどんどん入っていき行く。昨日の6号線のように抜けられるとの期待も虚しく通行止め。立派な門で塞がれている。持参した測定器が購入して以来の最高値を出していた。Uターンして別の道でもどった。

行った、見た、わずか4～5時間行った先の現実を。原発事故は始まったばかりだ。



アラセブ：アラウンド・セブンティ あるいはアラコキ

ツアー：主催はNPO野馬土（のまど） 18歳以下のツアー参加は要相談とのこと

本屋さん：柳美里氏の「フルハウス」この春に開店

避難：もちろん福島原発事故がまき散らした放射能からの避難

立入禁止地区：別の言い方では「帰宅困難区域」

バリケード：といっても、見慣れた成田空港まわりのそれではない。パンフレットの写真を。

放射能測定機：食品のベクレルを計る 証明には使えないとの断わりあり なお、測定結果は測定限界以下。

399号線：国道といえども、すれ違いを躊躇するようなところもある道路。

持参した測定機：エステー(株) T-ARTS 11年4月購入

✉ 村民からの手紙 ✉

私が村民になって10年近く。最初、友人が関わっていたのでその関係で通信を読み、麦・大豆畑トラストの会員になり、村民にもなった。

最初の頃はシンポジウムに足を運び、トラストの畑作業にも参加した。しかし最近仕事は忙しいこともあり、なかなか参加できていない。

それでも、しらたかノラの会（山形県白鷹町^{しらたか}）の周年行事や東海第二原発差し止め訴訟（水戸地裁^{とうかい}）などで、村民のみなさんに会うことができ、仲間意識を感じる事ができている。

私は団体職員として働いているが、趣味で30平米の畑で20種類以上の野菜を育てている。野菜作りをしていると、常に天気を気にしていることを実感。

野菜作りは9年になる。最初の頃は野菜の生育も良く、食べるのに困るくらい収穫できた。しかしここ5年くらい、夏は気温が高いことが多く、アブラムシやヨトウムシなどの害がひどくなっている。もちろんアブラナ科を栽培することが多いので、根こぶ病にも悩まされている。仕方なく、農園全体で農薬を使うことが多くなった。

夏場は雨量が少なく乾燥することが多く、8月ころだった人参の種まきが梅雨明け前に前倒しになっている。昨年の夏は、「今年も暑さと乾燥に悩まされるのか」と身構えていたら、空梅雨^{からつゆ}が終わった頃から雨量が多くなり、気温も下がるようになった。10月に入ると気温の低い日が続く、野菜の生育が不良に。春菊は一度収穫しただけで、それ以降は葉が伸びない。カブ、人参、二十日大根、サニーレタスも大きくなりません。

この冬は、同じ農園の仲間だけではなく、知り合いの農家と話しても、皆さん口を揃えて「寒すぎて野菜が育たない」と嘆いている。畑から地球温暖化を実感する。

福島にも通っている。仕事関係の人たちと「つながろう福島プロジェクト」というグループを作り、二本松市^{にほんまつ}に畑を借りて和綿を栽培。その農地と関係者の畑などでできた和綿でベストが編み上がった。和綿の量は微々たるものなので、5年分



の和綿を集めて、やっと1着作った。

復興のお役に立てばと始めた取り組みだが、私たちの方が福島の方々にお世話になっている感じだ。美味しいお昼をご馳走になり、野菜もたくさんもらって帰る。和綿の栽培計画、苗づくり、草むしりなど、すべてにわたってお世話になっている。しかも、野菜作りの悩みまで相談。本当に申し訳なく思ってしまう。

そんな農家の方たちがNGOなどと組んで、一昨年始めたソーラーシェアリングにはサポーターとして参加。水田を借りてソーラーパネルを設置するというので、農業委員会などの許可が出るのに時間がかかったが、今年ようやくパネルを設置できることになった。都合がつけばパネル設置にも駆けつけようと仲間と話している。

2年前、福島大学の先生に、復興の基本は「人間の復興」「被災者一人ひとりの復興」だと聞いた。これには二つあり、一つは「個人の尊厳を回復する、基本的人権を保障する」というもので、具体的には原発事故の責任の所在を明らかにし謝罪させる、帰還や避難の選択肢の多様化と支援など。もう一つは、「生きがい」「やりがい」で、これはアイデンティティにかかわるものだという。そこから考えると、今の「復興」のあり方が「人間の復興」に適っているのかと悩む。

福島に通うことは、自分の運動への関わりだけではなく、人はどうあるべきかという大きな問いに向き合うことではないか。

（村民 本田真智子）

千客 2018 万来

木の根

納涼祭

バンド&DJ
ライブ

【出演】
・恋をしようよジェニーズ
・黒点サミット
・everybody Eband
・ハルファイヤーダンス 他

みんなで踊ろう！
生演奏!!
盆踊り

【生演奏】
・ゲザリオン (仮名)

かき氷!
やきそば!
いろいろ
夜店

【出店】
・福笑屋
・PIZZA あるもんで
・やきそば他

豪華商品が当たる
抽選会

1000円以上の
投げ銭(カンパ)を
いただいた方に
抽選で豪華賞品を
プレゼント!!

とき 8月11日(土) 18時~ ところ 木の根ペンション

平和 入場無料 歓迎

木の根ペンションで「納涼祭」
8月11日(土) 18:00から
今年も木の根で夏祭り!
生演奏・生歌の盆踊りに、バンド、
ファイヤーダンス等々
美味しいビーガンピッツァ、本格コー
ヒーショップ等々も出店します!

今やネットやSNS界限でもウワサの
木の根ペンション、毎年『木の根^{はつ}発』
の新しい出会いやコラボ企画も生まれる
イベントです。さらに今年は、麻布^{あさぶ}の
ミュージッククラブオーナーや、土と平
和の祭典の主催者と共に作り上げる新感
覚イベントとなります。

皆さん是非ふるってご参加ください。
僕のイメージは横堀の盆踊りです(笑)
大森 武徳

~村民になってください~

実験村は、いまの社会のありようと、
私たち自身の暮らしを足元から問い直そ
うという試みです。国際空港という巨大
開発に抗し続けてきた三里塚の地を拠点
に、人々と結びあいながら水を、土を、
森を、人を大切にする“もうひとつの里”
づくりをめざします。あなたもぜひ、村
民になってください。

- 村民費 3000円
- 麦大豆畑トラスト 5000円
- 通信購読のみ 1000円
郵便振替

00140-3-92555

地球的課題の実験村

<問い合わせ>

電話/FAX

0476(26)1654 平野

メール:

jikken-mura@jcom.home.ne.jp

URL:

http://yamasoft.jp/jikken-mura/

【編集後記】

関東地方だけの梅雨明け宣言が出る一方、
西日本では記録的な豪雨に見舞われ、広島で
は100人を超える死者と安否不明者が出て
います。「村民からの手紙」にもありますが、
ここ5、6年の「異常気象」は軒並み「ウン
十年ぶりの…」が常套句になってしまった観
があります。「地球的課題」を実感せずにはい
られません。

これから最高気温35度を超える猛暑日が
各地に訪れそうですが、新しい実験村通信を
楽しんで、暑い夏を乗り切ってください。

(S)